

ティールーム

揺りかごでもあり足かせでもあり

たねむら かずひみ
種村 和史

(商学部教授・教養研究センター 副所長)

慶應義塾はおおらかな組織で、6つのキャンパスに10の学部が分かれて、それぞれ独自の理念に基づく多様で高度な活動が展開されている。だが、それを塾全体で統括する機関が存在しないことが多い。各部署の活動の自由度が高い反面、他の活動と連携し発展していくことが難しい。日吉・理工学部(矢上)・SFCの3メディアセンターを拠点として展開されているピアサポート活動もその通りである。

昨年度、日吉・矢上・SFCのピアサポート活動が初めて一堂に会し活発な情報交換を行った。そこで、同じくピアサポートシステムと言いながら、実に多様な活動が展開されていることがわかった。

文理7学部の主に1・2年生が学ぶ日吉キャンパスの「学習相談」では、学部2年から大学院生までの相談員がレポートの書き方、問題発見・問題の絞り込みなど大学での学びの基礎に関する悩みをサポートしている。理工学部の学部3・4年生と大学院生が集う矢上キャンパスのS-Circleでは、主に4年生と修士課程の相談員が学習のみならず生活・進路・読書推進など、学生生活を広く網羅する活動を展開している。3つの学部・2つの研究科の学部1年から大学院生がともに学ぶ湘南藤沢キャンパスのWRC(Writing & Research Consultant)では、博士課程・オーバードクターの相談員が初歩的なレポートの書き方のみならず、学会発表・学会誌投稿論文など高度な学術的アウトプットに関する相談を受けつけている。

このように書くと、思想も方法も活動主体も異なる活動が3キャンパスですんでばらばらに行われているとしか見えないかもしれない。しかし、ひとたび視点を変えて慶應義塾大学全体という高みに飛翔して眺めるならば、様々な場所で広汎な対象の多様な悩みに対応した相談活動が行われ、そのノウハウとデータが蓄積され続けている風景が見えてくる。しかもそれは理論的にプランニングされたものではなく、現場のニーズに応じて相談員たちが自主的に工夫を重ねた結果、自然に実現された多様性である。これらのノウハウとデータ、そして活動主体の学生たちは、今後活動をさらに発展させようとす

る時、そしてまだ活動が始まっていないキャンパス(三田キャンパスをはじめとする)で新たにピアサポートを立ち上げようとする時、大きな力となるだろう。これは地理的に離れて点在するキャンパスでそれぞれ独自の教育研究が行われている慶應義塾大学の条件が揺籃となって実らせた果実である。

しかし、この果実を熟成させそこから豊かな栄養を吸収するためには、これまで別個に存在してきた活動を繋げ交流させる必要がある。この時、キャンパス間の距離は活動の足かせとして働いてしまう。それぞれ独自の理念と論理で動いているキャンパス間で意思疎通することの難しさは慶應義塾で働く者ならば、だれも感じるところである。

ただ、ここで頼りになるのが相談員として活動する学生である。現場で働きつつ学ぶ彼らは、こちらが思いもつかなかった活動を立案し実現させる計画力・行動力を発揮する。教職員は、各地の相談員を交流させる機会を与えさえすればよい。後は彼ら自身でつきあい方を見つけてくれると楽観視していい。

しかし、学生たちは数年で移り変わっていく。彼らの作り上げた活動が持続できるよう支える存在が必要である。学生を信じ鷹揚に見守ることがピアサポートの主体性の揺籃になるが、人の移り変わりが活動の足かせとならないよう、活動の持続性を支えることが教職員の役割であろう。その意味で、メディアセンターに期待されるものは大きい。各メディアセンターは、学びの場としての図書館という思想を共有し、学生の活動を支え続けてほしい。

ただし、メディアセンターの職員には異動があり、担当者が入れ替わることによって活動の継承に困難が出てくる可能性がある。そこでサポーターとして期待されるのは、各学部・各キャンパスに終身所属する教員となろう。とは言え、活動に参画を求める上で最も難易度が高いのが他ならぬ教員であるのは頭の痛いところである。地理的なつながりとともに人間関係の面でもつながりを構築する方策を、たまたま活動を見守ることになった教員の一人としてメディアセンターと協力して考えていければと思う。

